

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター 2025年2月

contents

page

日本サンゴ礁学会第27回大会報告	2
日本サンゴ礁学会 公開シンポジウム開催報告	2
学術大会発表賞 受賞者の声	3
学会賞受賞者の声	4
自由集会 / 小・中・高生サンゴ礁研究ポスター発表報告	4-5
保全・教育普及奨励賞受賞者の声	6



日本サンゴ礁学会第27回大会報告

第27回大会実行委員会 深見 裕伸 (委員長)、安田 仁奈、北野 裕子 集の事態を広く紹介できたことは大きな意義がありました。

最後に、ご参加いただいた皆様、学会事務局、大会担当理事の皆様のご協力により、無事に大会を終えることができました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

2024年11月28日から12月1日にかけて、宮崎県宮崎市の宮崎市民プラザで日本サンゴ礁学会第27回大会が開催されました。宮崎県では初の開催となり、200名を超える参加者が集まりました。大会では、47件の口頭発表、83件のポスター発表（うち小・中・高校生による14件、保全活動に関する3件）に加え、3件の自由集会が行われました。

初の宮崎開催ということで準備段階では不安もありましたが、事務局や大会担当理事、アルバイト学生の協力のおかげで開催にこぎつけることができました。また、多くの参加者が宮崎を訪れ、地元の美味しい料理を堪能されたことと思います。国内外からの学生も多数参加し、会場内外で熱心に情報交換や議論が行われている様子が印象的でした。

口頭発表会場には、普段は演劇やコンサートで使用されるホールを使用し、参加者から「良い会場だった」との評価をいただきました。ポスター会場も広く確保できたため、気兼ねなく研究内容について発表や議論ができる環境を提供できたと思います。一部、口頭発表で接続トラブルが発生しましたが、大会全体としては大きな問題なく終了し、安堵しています。

懇親会は宮崎観光ホテルで行い、約120名が参加しました。懇親会では、中野会長と名誉会員となった堀信行先生の挨拶から始まり、その後、若手優秀発表賞とポスター賞の授与式が行われました。また、次回大会の実行委員長である波利井佐紀氏（琉球大学）から挨拶があり、次回の沖縄開催に向けた期待が高まりました。料理を十分楽しめなかったかもしれませんが、宮崎の焼酎は堪能していただけたのではないかと思います。

大会最終日の12月1日には、公開シンポジウム「温帯域サンゴ群集の保全の現状と課題」が開催され、一般参加者を含め約80名が参加しました。6名の講演者が温帯域のサンゴ群集における活動状況や保全の考え方について発表しました。サンゴ礁学会としては珍しく、温帯域のサンゴ群集に焦点を当てた内容で、多くの参加者にとって新しい知見を得る貴重な機会となったのではないかと思います。このシンポジウムを通じて、温帯域のサンゴ群



写真：懇親会の様子（宮崎観光ホテル）

日本サンゴ礁学会 公開シンポジウム開催報告

「温帯域サンゴ群集の保全の現状と課題」

安田 仁奈（東京大学大学院農学生命科学研究科）

サンゴ礁学会シンポジウム
「温帯域サンゴ群集の保全の現状と課題」

2024年
12月1日(日) 9:00~12:30
宮崎市民プラザ オールブライトホール
〒860-0001 宮崎県宮崎市橘通西1丁目1-2

参加費無料・登録不要
(当日参加できます)

主催：一般社団法人 日本サンゴ礁学会
後援：宮崎大学理学部

プログラム

1. 深見裕伸(宮崎大学産学部海洋生物環境学)「シンポジウムの趣旨説明」
2. 奥村正俊(徳島・海洋自然博物館マリンジャム)「小学生との移動活動から産卵ツアーに繋がるまで」
3. 藤本正明(山口・自然公園指導員「エコツアー」を育む地域の奮闘)
4. 小村秀哉(長崎・やっつらろうde高島)「エコツアーを地域活性化に繋げる」
5. 目崎拓真(高知・黒潮生物研究所)「西国のサンゴ群集と適応ネットワークの紹介」
6. 福田達彦(宮崎・グリーントダイバーズ)「日南海岸のサンゴ保全の取り組みと現状&課題」
7. 高橋勝栄(宮崎・延岡マリンサービス)「延岡市島浦島のサンゴ群集の保全活動」
8. パネルディスカッション

日本サンゴ礁学会 実行委員会 事務局(東京大学)主催
2024年12月1日(日) 9:00~12:30
宮崎市民プラザ オールブライトホール
〒860-0001 宮崎県宮崎市橘通西1丁目1-2
お問い合わせ先: 事務局(東京大学) 事務局 事務局
事務局連絡先: office@jcrs.jp (https://www.jcrs.jp/page_id=274) / 03-5541-3333

12月1日にシンポジウム「温帯域サンゴ群集の保全の現状と課題」を開催し、83名が集まりました。まず深見裕伸宮崎大学教授から趣旨説明として温帯域のサンゴ群集の定義と紹介がありました。徳島・海洋自然博物館マリンジャムの奥村正俊氏は、小学生によるサンゴ移植活動をきっかけに産卵ツアーへと発展させた取り組みについて説明するとともに、灯具開発や広報活動、旅行会社との連携などを通じて活動を広げる様子も共有されました。山口・自然指導員の藤本正明氏は、周防大島でのニホンアサンゴ群集の保全活動を紹介しました。土砂流出や繊毛虫の大量発生による影響が報告される一方で、竹林伐採やアベマキ林の整備が生息地の保全に寄与しており、陸海の連携の重要性を伝えました。長崎・やっつらろうde高島の小村秀哉氏は、エコツアーを活用して地域活性化を図る活動について説明し、シュノーケリンググピクニックの商標登録やメディアを活用した観光客誘致の成功例が示されました。高知の黒潮生物研究所の目崎拓真氏は、サンゴ群集の認知度向

上や適応ネットワーク構築の重要性を強調しました。特に、高緯度地域でのサンゴ群集に新たな価値を見出し、親しみをもった名称が温帯域のサンゴ群集につけられるようにという観点から議論がされました。宮崎・延岡マリンサービスの高橋勝栄氏は、島浦島での世代を越えた保全活動について、地域住民や漁業者との連携や保護ブイ設置、モニタリング活動などの現状を報告しました。宮崎・グリーントダイバーズの福田道喜氏は、日南海岸におけるオニヒトデの駆除を中心とした保全活動について述べ、駆除後のオニヒトデの活用方法や地域啓発活動の進展が紹介されました。シンポジウムの総合討論では、質疑応答からはじまりオニヒトデの処理方法についての議論がなされると同時に、最後に講演者一人一人から温帯域サンゴの保全における活動の継続性、後継者育成などが議論され活動継承者の育成重要性が強調され、今後の課題について多くの示唆が得られました。



写真：講演者によるパネルディスカッションの様子

学術大会若手発表賞(口頭)受賞者報告

Congratulations!

「ウスエダミドリイシで観察されたバンドル形成過程」

金城 寿気也(有限会社海の種)



この度、日本サンゴ礁学会第27回大会において「最優秀口頭発表賞」に選定いただき、大変光栄に思っております。

本観察では、ウスエダミドリイシ(*Acropora tenuis*)におけるバンドルの形成過程をタイムラプス撮影で記録しました。これまで、放出当日にセットアップされるバンドルの形成過程について詳細な記録はありませんでしたが、

今回の観察により、胃腔内まで配偶子運ぶポリプの蠕動運動、胃腔内での精子塊と卵の動き、そしてそれらが一体化してバンドルを形成する具体的なプロセスを明らかにすることができました。

本研究は、有限会社「海の種」の長年にわたるサンゴ養殖の経験と技術、そして中野義勝先生のご指導によって実現しました。特に中野先生には、データの解析や考察の過程で多大なご助言をいただきました。また、父である金城浩二が築き上げた養殖技術とノウハウも、本研究の基盤として大きく寄与しました。ここに深く感謝申し上げます。

今回の観察で得られた知見が、造礁サンゴの生殖機能の基礎理解を深めるとともに、有性生殖を活用した養殖技術の向上に役立つことを願っています。この研究が、サンゴ礁という貴重な生態系の保全や再生に繋がる一助となるよう、今後も研究に邁進してまいります。

最後に、本大会の運営に携わった日本サンゴ礁学会の皆様、そして会場で温かい声をかけてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。この受賞を励みに、さらなる研究活動を進めてまいります。

「サンゴ抗菌ペプチドの組織発現解析から推測する病原細菌の制御戦略」

青山 華子(東京大学大学院新領域創成科学研究科/大気海洋研究所)



この度は発表賞にご選定いただき、誠にありがとうございます。

本研究では、コクビミドリイシ *Acropora digitifera* の全く新しい抗菌ペプチド遺伝子を特定し、その機能解析を行いました。「Digitiferin」と命名した本抗菌ペプチドは、組織発現解析によりサンゴの外胚葉細胞において局所的に発現しており、体表を覆う粘液中に分泌されていることが明らかになりました。さらにDigitiferinはマンニトールを用いた抗菌活性評価の結果、主要な病原細菌の一つである *Vibrio coralliilyticus* に対して殺菌作用を示すことがわかりました。これらの結果から、Digitiferinは外胚葉細胞から粘液中に分泌されることでサンゴの第一線の感染防御機構として機能していると考えられます。

機能未知遺伝子であったDigitiferinの機能を詳細に解明するために、これまでに異種タンパク質発現や抗菌活性評価、立体構造予測や走査型電子顕微鏡観察による作用機序の予測、組織切片を用いた免疫組織化学染色による発現部位特定など、1つの手法にこだわらず様々な実験アプローチに取り組んできました。これからも様々な分子生物学的な手法を駆使してサンゴ遺伝子の詳細な機能解析を行うことで、免疫機構を含めてホロバイオを作り出す未知なる分子メカニズムを解明していきたいと思っております。

最後に、5年にわたり研究の指導をくださった高木俊幸先生、井上広滋先生、そしてセミナー等で議論してくれた研究室メンバーに深く感謝申し上げます。

学術大会若手発表賞(ポスター)受賞者報告

「A. tenuis プラヌラ幼生に着生行動を誘導するバクテリアの同定」

石川 舞結(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)



この度は、最優秀ポスター発表賞を賜り、誠に光栄に存じます。本研究では、ミドリイシサンゴのプラヌラ幼生が基盤表面で行う特有の着生行動に着目し、基盤上のバクテリアフィルムからその行動を誘発する株を単離・スクリーニング・同定しました。これらのバクテリアはそれぞれ *Alteromonas* 属、*Pseudoalteromonas* 属、*Vibrio* 属に分類され、各株が異なる行動を誘発することが明らかになりました。本研究で同定したバクテリアは、着生行動の機序解明に貢献するだけでなく、サンゴの着生率改善にも応用できる可能性があります。

本研究を進める上で最も大きな課題となったのは、サンゴ幼生を使った実験が年に一度の2週間程度しか行えないことでした。限られた時間で成果を出すためには、計画性と効率的なデータ収集が不可欠で、多くの試行錯誤を重ねました。1年目には着生行動そのものを観察し、2年目には行動の詳細を記録、そして3年目により着生行動を誘発するバクテリアの単離・同定に成功しました。失敗が許されない緊張感がありましたが、このような貴重な経験を学生のうちに積めたことができたことに、深く感謝しています。

短期決戦型の実験の楽しさと、限られた時間を最大限に活用する工夫を教えてくださいました田中昌之先生に、心から感謝いたします。また、本研究は笹川科学研究助成およびエスプレック地球環境研究・技術基金の支援を受けて実施いたしました。この場を借りて、両助成の関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。本研究が、サンゴに関わる新しい知見や技術の発展に寄与できることを心より願っております。

短期決戦型の実験の楽しさと、限られた時間を最大限に活用する工夫を教えてくださいました田中昌之先生に、心から感謝いたします。また、本研究は笹川科学研究助成およびエスプレック地球環境研究・技術基金の支援を受けて実施いたしました。この場を借りて、両助成の関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。本研究が、サンゴに関わる新しい知見や技術の発展に寄与できることを心より願っております。

「海水温が高くなるとサンゴは褐虫藻と出会いにくくなる？」

横山 友起(琉球大学大学院理工学研究科)



この度は優秀ポスター賞に選定いただき、誠にありがとうございます。心より光栄に思っております。

近年、夏季の海水温上昇によるサンゴの白化現象が深刻化しており、今年は私が研究している沖縄県瀬底島周辺でも大規模な白化が観測されました。白化したサンゴは高温に適した褐虫藻を新たに獲得することで、高温環境に適応できると考えられています。しかし実際には、白化したサンゴが死滅する事例が多く、サンゴの高温適応は容易ではありません。私はその一因として、高水温時にサンゴのGFP(緑色蛍光タンパク質)由来の緑色蛍光による褐虫藻の誘引が起きにくくなり、両者が出会いにくくなるのではないかと考え、本研究を始めました。

本研究では、海水温が褐虫藻の誘引に与える影響を調べるため、人工的な緑色蛍光物体を用いて実験を行いました。結果、25度から32度で培養した褐虫藻は緑色蛍光物体に集まりましたが、34度では集まりませんでした。さらに、各温度で褐虫藻の運動割合を調べたところ、34度では運動割合が1%未満に低下することがわかりました。これらの結果から、高水温下では褐虫藻の運動性が失われ、緑色蛍光による誘引が起きにくくなること示されました。このことは、高水温下でサンゴと褐虫藻が出会いにくくなり、それがサンゴの高温適応を困難にする要因の一つであることを示唆しています。今後は、さまざまな褐虫藻種の高水温下での運動性を評価し、運動性が低下しない褐虫藻株を見つけることを目指しています。

最後に、本研究を進めるにあたり、多大なご指導をいただいた高橋俊一先生、共に研究を行っているラボメンバー、そしてご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

受賞者：茅根 創（東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻） ✉ kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp
 受賞タイトル：「サンゴ礁島嶼生態系の生態系機能と環境保全」

授与理由

茅根会員は1980年代よりサンゴ礁の自然地理学的研究を始めました。その後、地球温暖化が顕在化する中で、地球環境変動（海面上昇、海水温上昇、海洋酸性化）に対するサンゴ礁の応答に着目し、琉球列島や太平洋島嶼国において、多岐にわたる研究を展開してきました。これらの研究成果はScience誌など多くの国際学術雑誌等に公表され、質・量ともに高く評価されています。また、2008-2012年度科学研究費新学術領域「サンゴ礁学」を研究代表者として推進し、サンゴ礁学を学際的な分野として確立させるとともに、サンゴ礁学の人材育成にも貢献しました。日本サンゴ礁学会の活動としては、1997年の学会の創設に尽力し、その後約20年間学会の事務局長を務め、学会の体制整備や運営に多大な貢献をしました。国際的な活動としては、2004年に開催された第10回国際サンゴ礁シンポジウム（約1700名参加）において、大会の事務局長として開催を成功に導きました。

受賞者のあいさつ

このたびは、日本サンゴ礁学会賞を受賞いたしまして、たいへん光栄に思います。

受賞の主な理由が、学会の設立とその後の運営に尽力してきたことだと思います。その経緯については、学会設立10年と20年の特集号に寄稿した通りです。2つのレビューで挙げた今後の課題のうち、達成されたものもありますし、達成されていないものもあります。それらについてはこれからの世代の方々に託します。ただ、設立20年を機に法人化した学会が、それまでもすれば仲間意識で運営されていた学会（責任の一端は運営を担ってきた私にもあります）が、理事長と理事会のもとで社会的にも認められる組織として発展していることを、大変心強く感じています。

授賞理由のもうひとつ研究面の成果については、このあと受賞レビュー論文にまとめます。サンゴ礁は、海と陸の接点に生物が造り上げた地形であり、人間活動や、地球温暖化・生物多様性など地球規模の課題とも密接に関わるため、地学、生物学、化学、物理学、工学、水産学、人文社会科学など、さまざまな分野にまたがる学際的な研

究対象です。私自身も、地形学を出発点に、これらさまざまな分野を歩き来しながら、そのたびにサンゴ礁から多くを学びつつ研究を進めてきました。本学会が、学際的な研究の相互作用の場として、また社会との接点の場として、さらにこの分野の後継者を育てる場として、引き続き発展していくことを、心より祈念しています。



写真：受賞の記念品として推薦者の皆さんから贈られたサンゴ柄のネクタイを着用して

自由集会報告

自由集会①

タイトル：座談会：「サンゴ礁保全とは何か？」を考える～「熱い自然」と「熱い心の島」の先に～
 （主催 サンゴ礁保全学術委員会）

オーガナイザー：サンゴ礁保全学術委員会・委員長 藤田 喜久（沖縄県立芸術大学） ✉ fujitayo@okigei.ac.jp

2024年11月28日 18:30～20:30の日程にて、サンゴ礁保全学術委員会主催の自由集会『座談会：「サンゴ礁保全とは何か？」を考える～「熱い自然」と「熱い心の島」の先に～』が開催されました。

これまで、サンゴ礁保全学術委員会では年次大会期間中にミニシンポジウム形式にての話題提供（例：国内外のサンゴ礁保全動向、造礁サンゴの移植、サンゴ礁生態系保全における化学物質と多量および微量元素）を行ってきました。毎回、多くの参加者を集めてきており、サンゴ礁保全に対する学会員の関心の高さを伺い知ることができました。

その一方で、サンゴ礁を取り巻く研究環境や社会環境が大きく変わるにつれ、「守るべきサンゴ礁のイメージ」に対する世代間のギャップのようなものを感じることも増えてきました。つまり、研究歴の長い研究者と若い世代では、見ているサンゴ礁の風景が異なっているのです。こうした「守るべきサンゴ礁のイメージ」のギャップは、世代間のみならず、居住地、生まれ育った環境、自然との関わりや体験の程度、そして関心がある研究対象（研究上の興味・関心）などによっても異なる可能性があります。

このような背景から、昨年度（2023年）の自由集会では、『サンゴ礁生態系の保全にサンゴ礁保全学術委員会が果たす役割』を実施して、これまでのサンゴ礁保全学術委員会の活動を振り返る目的の自由集会を開催しました。そして、今回の自由集会では、世代や専門分野の異なる研究者のサンゴ礁保全に対する想いや考えを語ってもらう座談会を企画することになりました。

自由集会では、まず、座談会の参加に際する必読書と設定した「熱い自然—サンゴ礁の環境誌（1990年）」と「熱い心の島—サンゴ礁の風土誌（1992年）」の2冊の書籍の出版の経緯について、堀先生にお話ししていただきました。その後、事前に申し込みのあった9名の参加者による座談会を実施しました。座談会では、『サンゴ・サンゴ礁（生態系）の保全に関して、これ

までに出来てきたこと、来ていないことは何か？』、『サンゴ・サンゴ礁（生態系）の保全における「学会」の役割』、『あなたにとってサンゴ礁保全とは？』の3つの質問テーマに対して、参加者に自由に語ってもらうこととなりました。多様な考えや意見を集めることができ、とても有意義だったと感じています。

今回の自由集会は、事前登録制であったにもかかわらず、聴講を含めると30名の参加申し込みがあり、また、当日参加も多く、大変盛況でした。座談会後に会場に意見を求めた際には、若い研究者（学生）からも貴重なコメントをいただくことができ、大きな感銘を受けると共に、サンゴ礁保全の現場でも世代交代の必要性を感じる機会となりました。今回の座談会の内容は、今後数回の座談会延長戦を経て、何からの形で活字（読み物）として残す予定となっています。サンゴ礁保全のバトンを若い世代につなぐ前の大切な仕事だと考えています。



写真：座談会の様子

自由集会②

タイトル：潜水業務における責任の所在とリスクマネジメントに関する現場の課題の共有

オーガナイザー：調査安全委員会  27yasuda@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

東京大学環境安全管理室の水口先生をお招きし、「潜水におけるリスク管理」をテーマとした自由集会を開催しました。本集会には約30名が参加し、講演やディスカッションを通じて活発な意見交換が行われました。

集会の冒頭では、シルバン委員長より、潜水の安全管理に関するアンケート調査の集計結果が紹介されました。この調査には77名の会員が回答し、多くの大学や研究機関で適切な講習会や安全管理体制が十分に整備されていない現状が明らかになりました。アンケートの詳細は次号のニュースレターで公開される予定です。この課題を踏まえ、潜水活動の安全性を向上させるための方策について議論が行われました。



写真：座談会の様子

水口先生の講演では、日本水産科学協会と共同で進めている「潜水の安全教育プログラム」の構築に関する詳細が語られました。リスクの軽減方法やヒヤリ

ハット事例からの共通注意点の抽出、さらに大学や研究機関を超えた統一的な安全管理プログラムの必要性について、具体例を交えながら解説がありました。また、中野会長からはOIST（沖縄科学技術大学院大学）で発生した潜水事故と、その後の事故防止策に関する具体的な事例が共有されました。特に、事故を受けた組織の体制見直しや実践的な改善策について詳しく説明がありました。

議論では、「事故発生時の責任の所在と関連法律との兼ね合い」、「関連学協会による潜水安全管理の協力体制の構築」、「サイエンスダイビング、作業ダイビング、レジャーダイビングの違いと、それぞれに求められる安全管理体制」について深く議論されました。これらの議論を通じ、潜水活動におけるリスク管理の現状と課題がより明確になり、安全管理体制の改善に向けた意識の高まりが見られました。特に、大学や研究機関が独自に安全対策を進めるだけでなく、関連学協会や外部専門機関と協力し包括的なプログラムを構築する必要性が強調されました。

最後に、集会にご参加いただいた皆様、貴重な講演を行ってくださった水口先生、中野会長、そしてアンケートにご協力いただいた会員の皆様に深く感謝申し上げます。次回の集会でも、安全管理のあり方について有意義な議論が行えることを期待しております。

自由集会③

タイトル：喜界島サンゴロジ

オーガナイザー：渡邊剛（総合地球環境学研究所、NPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所）、山崎敦子（名古屋大学、NPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所）、駒越太郎（NPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所）  komataro@kikaireefs.org

宮崎市民プラザで11月29日に開催した自由集会「喜界島サンゴロジ」では、「サンゴ礁の学び場をつくる」をテーマに、理想的な学びの場とはどんなものかを考えるワークショップを開催し当日24名の参加がありました。

喜界島サンゴ礁科学研究所は来年度で10周年を迎えます。これまで多くの研究者のみなさんの研究拠点として、地域のプラットフォームとして活用いただき、たくさん子どもたちや大学生・大学院生の学び場となりました。

集会では、サンゴ礁学会に集まる研究者・実践者・大学生／大学院生・小中高生とその保護者のみなさんの、理想的な教育・学びの場とはどんなものかを考え、話し合うワークショップを実施しました。はじめに理想の学びの場の要素について、参加者一人一人の意見を付箋に書き出しました。その意見ごとに参加者は、体験、環境、人などのグループに分かれ、理想の実現に必要なことは何かを話し合い、その過程で何が壁になるか、その

壁を打破するために必要なことは何かをグループディスカッションを行いました。発表では学びの場に必要なことは、ライバル、自然環境、五感での体験、色々な人と話せることなどたくさんの意見が出ました。課題としては資金も上がりましたが、高い熱量を持つ人が必要など、モチベーションに着目した意見もありました。当日は遅い時間での開催でしたが参加者間で充実した対話を行うことができ、喜界島サンゴ礁科学研究所の今後の活動にも有意義な意見をいただきました。



写真：自由集会「サンゴロジ」でのワークショップに取り組む参加者の様子

小・中・高生サンゴ礁研究ポスター発表報告

担当：教育普及・啓発委員会 北野裕子（一般財団法人自然環境研究センター）・駒越太郎（NPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所）
中島祐一（国立研究開発法人国立環境研究所）  coralreefseducationoutreach@gmail.com

今年度の小中高生ポスター発表には、玉川学園サンゴ研究部と喜界島サンゴ礁科学研究所から16名の児童・生徒が参加し、14題のポスター発表を行いました。今年も全国各地からのご参加に、委員会一同、心より感謝申し上げます。

どの発表者も大会に向けて発表練習を重ねてきたことが伺え、最初は緊張していた人も、1時間の発表コアタイム中にスムーズに説明ができるようになっていました。参加者からの質問にも自信を持って応えられており、大変素晴らしいです。

発表者の中には昨年の大会に引き続いて同じテーマで発表をしてくれた人もおり、研究の深まりが感じられました。これには大変喜ばしく思うと共に今後の展望がますます楽しみになりました。また、先入観にとらわれない切り口や独特な表現が興味深い発表、研究に対する熱意やそのきっかけにこちらがハッとさせられる発表もあり、多くの刺激を受け取りました。

今年も16名の発表者全員に、参加証明書とともに、学会参加者からいただいた講評を集計した評価シートをお送りしました。講評にご協力くださ

た皆さまには、改めて感謝申し上げます。多くの温かいコメントや励ましの言葉が寄せられ、発表者たちの今後の研究活動への大きな励みになると思います。

発表の様子は特設サイトからご覧いただけます。
<https://sites.google.com/view/jcrs-edu-poster/>



写真：小・中・高校生によるサンゴ礁研究ポスター発表会場の様子

日本サンゴ礁学会 保全・教育普及奨励賞受賞者報告 /

藤田 喜久 サンゴ礁保全学術委員長、2024年度 保全・教育普及奨励賞選考委員会 委員長

中村 隆志 教育・普及啓発委員長

Congratulations!

活動名：三宅島の海洋生態系のモニタリングおよび環境普及活動

活動実施団体：公益財団法人日本野鳥の会（三宅島アカコッコ館チーフレンジャー：内藤 明紀）

✉ naito @ wbsj.org

授与理由

三宅島において1998年より計20回（審査当時）にわたって継続的なリーフチェックを実施しております。また、陸域から海域までを網羅して三宅島の特色ある自然の理解と保護に貢献しつつ、多くの人々に島の自然の魅力を伝える発信を行ってきております。これらの実績が、特に活動の継続性という点で非常に高く評価され、受賞に値する活動であると判断されました。今回の受賞を機に、日本サンゴ礁学会との連携をより一層深めることで、モニタリングデータの充実や、サンゴや海洋生物に関する情報発信などにさらに力を入れ、伊豆諸島の島嶼海洋生態系の調査・保全活動の拠点としてこれからも機能し続けて頂けることを強く期待いたします。

受賞者のあいさつ

三宅島の村営施設「三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館」は1993年に開館しました。開館以来、運営を行っている公益財団法人日本野鳥の会が継続して行っている活動が日本サンゴ礁学会の保全・教育普及奨励賞をいただき、大変うれしく思います。

日本野鳥の会がサンゴ？と思う方も多いのではないのでしょうか。日本野鳥の会は野鳥や自然の素晴らしさを伝えながら、自然と人間とが共存する豊かな社会の実現をめざし、活動を続けている自然保護団体です。そのため、陸域だけでなく、海の自然環境の大切さ、楽しさ、素晴らしさを多くの人に伝えて、守る活動も行っています。



写真1:リーフチェックの様子。1998年から継続して実施し、2024年には21回目となる調査を行なった。



写真2:地元小学校の総合学習の様子。郷土の海を大切にする心を育む目的で実施している。

伊豆諸島の三宅島は黒潮の影響を強く受け、島の周辺には多くのサンゴや熱帯の海水魚が生息しています。それらの環境やそこで暮らす生き物は人々に海の楽しさ、素晴らしさ、大切さを伝えるものとして十分な存在です。そのため、潮だまりでの海水魚調査やリーフチェックを継続して実施し、海の状態や魅力を調べています。そして、観察会などを通し、蓄積した情報や魅力を多くの人に伝えてきました。

これからもこれらの活動を通して、たくさんの海が好きな人、海に関心を持つ人を増やし、素晴らしい海を大切に未来に残していく力を育てていけるよう頑張っていきます。また長い間、調査や観察会に参加いただいた皆さまありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いたします

活動名：玉川学園サンゴ研究活動（TAMAGAWA ACADEMY SANGO PROJECT）

活動実施団体：玉川学園サンゴ研究部（顧問：市川 信）

✉ makoto @ t.tamagawa.ed.jp

授与理由

生徒自らの興味と探求心からサンゴ研究部を立ち上げ、専門家や地元とも連携して幅広い活動へと展開している点が特に高く評価されました。また、広報や普及、企業とのタイアップなど社会との繋がりを意識した総合学習プログラムとしての活動は多くの学校の模範ともなりうる活動と言えます。生徒たちの行動力を高く評価するとともに、その活動を下支えした先生方の多大な尽力も高く評価され、受賞に値する活動であると判断されました。玉川学園サンゴ研究部から輩出された卒業生が、将来サンゴ研究を担い、弊学会でも活躍してくれるような人材となることを期待しております。

この度、「保全・教育普及奨励賞」に選定いただき、心より感謝申し上げます。

玉川学園サンゴ研究活動は2011年にスタートし、フィールドワークや研修を通じて、サンゴを取り巻く自然環境の重要性を学ぶことを目的としています。学びの過程において大学や漁協の関係者、観光業の方々、水族館スタッフ、企業団体、地域の方々など(1)の協力を得ました。これらの交流は、生徒たちにとってサンゴの生態・自然環境・保全活動などについて学ぶ貴重な機会となっています。

現在、活動の中心となる取り組みは、伊江島海から採取したサンゴを株分けし、玉川学園内の水槽で飼育・成長させ、その後再び伊江島海へ戻すプロジェクトです。この取り組みを通じ、サンゴの保全と自然環境の再生を目指しています。

生徒は、サンゴの飼育や移植に関する研究、広報活動、研修活動(2)を通じて、保全活動の重要性や課題に向き合い、研究に関する試行錯誤を重ねています。生徒たちが将来、培った知識や経験を活かすことにより、現代社会に生じる課題、特に環境問題の解決を促すことを願います。

皆様のご指導・ご支援を賜り、今回の保全・教育普及奨励賞受賞を受賞することができました。心より感謝申し上げます。生徒たちが楽しく意欲的に取り組めるサンゴ研究・保全活動の輪を広げることを目標に、今後も玉川学園サンゴ研究部での研究活動を継続していきたいと思っております。引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(1)再生プロジェクト協力企業、団体【伊江島海の会、国際航空株式会社、西松建設株式会社】

(2)研修活動先【お茶の水女子大学、琉球大学熱帯生物圏研究センター、平沢マリセンター】



写真:2024年度保全教育普及奨励賞の授賞式にて

編集後記 Editor's postscript

小笠原諸島の父島にいます。快適な気候です。冬の寒い時期は、ここで暮らしたいなあ…。

編集担当：山本 将史



2025年 2月 19日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター [2025年 2月]

Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.104

- 編集・発行人 / 「日本サンゴ礁学会広報委員会」
- 樋口・本郷・山下(洋)・柏本・岨・高木・田中(健)・藤井(琢)・山本(将)・湯山・善岡・和田
- 発行所 / 一般社団法人日本サンゴ礁学会 ● 事務局 e-mail : info @ jcrs.sakura.ne.jp
- 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 一般社団法人日本サンゴ礁学会